

(5) 晩年

18年もの長い間アメリカに住んでいれば、おそらくその文化と習慣こそが体に馴染み、帰国した日本こそ、違った世界に変貌して見えたのではないだろうか。滞米中に師匠の小山正太郎も没して画壇もすっかり様変わりし、この帰国の年の7月には鷗外も死去している。47歳で帰国した蘆原のその後の足跡は、やはり不明な点が多いが、制作活動をしていたかどうかは、太平洋画会の出品目録²⁷⁾に辿ることができる。滞米中は日本の画壇での発表は一切途絶えていたが、帰国した翌年、大正12(1923)年第19回展から早速出品を再開している。帰国直後は「ニューヨーク郊外」「セントラルパーク」などのタイトルが続くことから、ニューヨークの風景を題材に描いたものが多いことがわかる。また、翌年の太平洋画会第20回展は、通例の東京上野会場だけでなく、大連及び奉天の会場でも開催されているが、この年は蘆原の出品数も多く、展覧会の周年記念のためというだけでなく、滞米時代の成果のお披露目の意味合いもあったのでは、との解釈もできる。いずれも現存作品は確認されていないが、太平洋画会展には、一部の時期を除いてほぼ毎年、昭和9(1934)年の第30回展まで連続出品しており、作品につけられた値段から、小作ばかりではなく大作も含まれていたことが推測される。これには日本画壇と疎遠になり、長らく忘れ去られていた期間の穴を埋めるような気持ちで暗に働いたのかもしれない。まだ帰国してまもない大正13(1924)年の第20回展からは同会会員となっている。また会員の住所覧には「芝區新堀町三一」と記録されており、帰国後は東京に在住していたことがわかる。この住所は昭和7(1932)年「大阪市外箕面村桜ヶ丘」に記載が変わるので、晩年は大阪に移り住んだことも判明した。太平洋画会出品作で唯一作品の様子が伝わるのが昭和9(1934)年の第30回展に出品した《眠》という作品であるが²⁸⁾(図17)、眠る愛猫の姿に初老を迎えた画家の穏やかな心境が透けて見えるような気がする。



(図17)
《眠》1934年 太平洋画会第30回展出品

太平洋画会以外の出品について見ていくと、大正14(1925)年、第6回帝展に出品した記録が残る。《電車道》と題されたこの作品²⁹⁾(図18)は、雪道を縦横に行き交う人々と路面電車がやや俯瞰した位置から描かれており、大正の街の風情を醸す店の外観や、洋装と和装が入り交じる人々の風俗など、細部に注目すべき点はあるが、とりたてて特徴的な絵だとは言えない。しかし、この絵を含め、大正末から昭和の初期にかけての蘆原の出品作のタイトルをしてみると(年表参照)、雪への関心、夏や秋などをテーマにしたものが集中しており、季節の移ろい



(図18)
《電車道》1925年 第6回帝展出品

を感じさせる主題が多いことに気がつく。久し振りの故国で日本の四季の美しさを実感し、それを形に写し取ろうとしたのだろうか。またほかにも、昭和9(1934)年の大礼記念京都美術館美術展覧会への出品が確認されている。ここでは《或る日の晝室》という作品を出品している³⁰。これは公募展ではなく、京都市美術館が開館記念展として開催した展覧会で、京都在住の選定委員により、市内在住者を中心に出品者が選ばれる形式をとったらしい³¹。その後の太平洋画会会員名簿には、前述と同じ大阪の住所が掲載されているので、おそらく京都在住ではなかったと思われるが、拠点を関東ではなく関西に移した後の活動の一端を示す事実として興味深い。また、関西に転居にした後の蘆原の様子が知れる記録がもうひとつある。昭和6年、晩年の藤島武二は、宮中花蔭亭パネルの制作依頼を請け負うが、そのパネル制作のために藤島が蘆原や小林茂とともに和歌山県潮岬に滞在したという記録がある³²。当時の交流関係や、蘆原が藤島の制作にどのような関わりを持ったかについては不明だが、藤島は蘆原が東京美術学校に在学していたときの恩師であり、藤島の仕事を手伝うようなことがもしあったとしても不思議ではない。この時ともに滞在した小林茂は、和歌山県生まれの洋画家で、川端画学校で藤島に習っていた。いずれも藤島の教え子ということになる。そして蘆原と小林の共通点はそれだけではない。このパネル制作より2年前の昭和3年、蘆原と小林と平井武雄の3人は、新たに昭和美術会という美術グループを結成している。この会は、フランスのアンデパンダン展に倣って、無鑑査の会を作ろうという趣旨のもと結成されたグループ展で、第1回展は同年8月27日から29日まで銀座の資生堂ギャラリーで開催された。第1回展では一般公募は行われず、会員3人の作品のみを展示し、蘆原は《倉二つ》《妙義の朝》《多摩御陵附近》など油彩15点を展示したという³³。この無鑑査の会を作ろうという趣旨には、フランスのアンデパンダン展というよりも、むしろ蘆原がアメリカ時代に出品していた独立展覧会の存在を思い起こさせる。審査に縛られず、人も作品も問わない自由な発想で多くの才能を発掘し団結しようという試みは、当地で得た開拓精神に基づくものではなかったか。メンバーの一人、平井武雄は、北海道出身の洋画家で水彩画家としても知られるが、彼もまた明治40(1907)年に渡米しており、ニューヨークでアート・ステューデントズ・リーグに通って絵を修業した経歴を持つ。蘆原の滞米時期と重なることから、その時からの知り合いとも考えられる。

さて、以上のように、アメリカ帰国後の蘆原は、専ら洋画家としての活動を主としているが、挿絵画家としてのもうひとつの顔は、もはや世間に忘れ去られてしまったのか。実は、昭和3(1928)年『ゴルフ漫画』という本を「アシハラヒロシ」の名でゴルフドム刊行会から出版している。本書は、ゴルフに興じる人々をユーモラスに描いた珍しいタイプの漫画本と言える(図19～21)。同年、太平洋画会展に出品している作品名が《ゴルフ》《スキー》であるのも興味深い(年表参照)、53歳の蘆原自身が当時ゴルフに興じていたらしく、プレイヤーへの皮肉やそ



(図19)
『ゴルフ漫画』表紙



(図20)
『ゴルフ漫画』「夢は逆夢」



(図21)
『ゴルフ漫画』「池の魚属」

の気取った姿のおかしみなどを描きながら、同時に愛情のこもった視線が感じられる。

蘆原がいつ没したのかは、今回の調査では判明しなかった。太平洋画会展では昭和9年の第30回展の出品を最後に、10年以降出品記録が途絶えている。また、会員名簿には翌年の昭和11年まで掲載があるが、昭和12年以降は名前が削除されている。物故会員は亡くなった年に遺作が出品されることがあるが、その形跡は目録にない。一方、平井武雄の物故記事に「昭和3年故芦原曠、小林茂等と昭和美術会を創立した。」とあり³⁴、平井が昭和18年に亡くなっていることから、少なくとも同年には蘆原が既に死去していたことがわかる。これを太平洋画会の記録と合わせると、名前が削除された昭和12年から昭和18年の間に死去したものと考えられる。

2. おわりに

以上のように、蘆原曠(号緑子)という画家の人生と仕事の概観を追ってみると、新旧派の対立、日露戦争従軍、長期の滞米生活、帰国後の地道な制作活動と、近代の変革期にありながら、光の当たる場所を目指して歩んだというよりは、その反対側の途を敢えて選んで進んだような印象を持つ。しかし、例えば所々日陰になるような処がある場所でも、誠実な足取りで様々なことに取り組み、その時々に関心出来ることを最大限努力してチャンスをつかもうとする人物像も想起される。時として、才能を持ちながらあらゆることを器用にこなせる人は、その応用性、受容力の広さゆえに自己の名声に執着せず、深い足跡を歴史に刻む強い靴底を持たない。また、戦争挿絵画家としてのイメージと、長らく日本を離れていたこと、描いた油彩作品の所在がほとんど判明していないことも、この画家を識ろうとする上で大きな障害となっている。しかし、文学者としてだけでなく、美術への確かな審美感覚を持っていた森鷗外が『うた日記』では文章を綴ることを放棄し、戦争の矛盾と理不尽な現実への想いを内包した言葉が持つ力を信じて挑んだ、その一大詩歌句集の挿絵画家の選定に関わっていなかったわけではなく、若き画家、蘆原曠の持つ感性の豊かさを見抜いていたのではないかと、この想いを強くした。それは、情報を冷静な視点で見つめ、即時にビジュアル化する技術と、絵が秘める叙情性と心理描写、風景描写の才覚である。『うた日記』の挿絵画家の3人全員が戦争という現場を経験していることから、鷗外が挿絵の役割の重要性をいかに意識していたかがわかる。今回の調査では、アメリカ滞在時期を中心に、まだ見過ごした文献も多々有ると感じる。本稿を機に今後新たな情報もたらされるかも知れず、今後も追究を継続していきたい。

最後に、本稿執筆にあたり、情報提供の面で、森鷗外記念館(津和野)の山本博之氏、文京区立森鷗外記念館の岩佐春奈氏、有島記念館の伊藤大介氏、北海道立近代美術館の中村聖司氏にご協力を賜った。ここに記して重ねて厚く御礼申し上げます。

(当館専門学芸員)

註

- 1 末延芳晴『森鷗外と日清・日露戦争』平凡社、2008年8月20日、p.166
- 2 署名のない挿絵2図は、作風から久保田米斎と推測されるが断定はできない。森潤三郎著『鷗外森林太郎』丸井書店、1942年4月10日には、「葦原緑子氏の寫生畫二十七葉、久保田米齋氏の畫六葉、寺崎廣業氏の木版彩色畫一葉、寫眞版八葉挿入」と表記されている。装丁者については米斎と推定する説が多い。
- 3 二人の画家と鷗外との関わりについては、拙論「『うた日記』の挿絵にみる葦原緑子の作風について」『森鷗外記念館館報 ミュージアムデータ18 森鷗外「歌日記」挿画集』森鷗外記念館、2014年3月31日にまとめた。
- 4 蘆原緑子の姓の表記は他に「芦原」「葦原」があり、資料によって異なる。拙論（註3）では、森潤三郎の著作（註2）の表記に合わせて「葦原」で統一したが、太平洋画会展や帝展の出品記録には「蘆原」の表記が主であり、本稿ではこちらを使用した。また、「蘆原曠」の読み方はサイン表記の違いから、「あしわらこう」と「あしわらひろし」の両方を使っていた形跡がある。
- 5 号が緑子であることが載るのは、『東京美術学校一覽』従大正4年 至大正5年（1915年、東京藝術大学附属図書館蔵）以降。「在米国 蘆原曠 北海道 士 號緑子」。
- 6 註3に同じ。
- 7 同書p.153「蘆原 曠（洋）八年金澤生、東美校卒、三八—大正一—滯米、帝展出品（芝新堀町三一）」
- 8 註5に同じ。
- 9 蘆原の生年、明治8年頃の北海道は、明治政府の開拓政策の初期にあたる。前年の明治7年に屯田兵制度が制定され、8年4月から最初の屯田兵を実施。198戸が札幌近郊の琴似村（現在の札幌市西区琴似）に入植したのが初となる。当時の入植者は限られており、今回は屯田兵名簿や開拓史資料の一部を参考に調査したが、該当者が見つからなかった。明治初期の北海道出身者を探す手法については、有島記念館の伊藤大介氏に調査方法をご教示いただき、貴重なご助言をいただいた。
- 10 一例としては、1892（明治25）年、夏目漱石が徴兵を免れるために分家し、北海道後志国岩内郡吹上町十七番地に戸籍を移した例がある。しかし蘆原の場合は、明治8年という時期の早さと、成人後は記者として日露戦争に従軍しているため、徴兵忌避の例に該当するとは考えにくい。

- 11 日本パノラマ館のことについては、山田直子「小山正太郎・不同舎門人筆<日清戦争パノラマ画>考」『女子美術大学研究紀要』34号、女子美術大学、2004年などを参考にした。
- 12 林誠編「年表」『もうひとつの明治美術 明治美術会から太平洋画会へ』展図録、もうひとつの明治美術展実行委員会発行、求龍堂、2003年p.236による。因みに、『小山正太郎先生』の石川寅治の記述によれば、本郷の団子坂の上にあった時期の不同舎は、隣が鷗外の邸宅に接していた近さであったというから、物理的な距離感で言えば、鷗外と蘆原との接点はかなり近いところにあったと言える。
- 13 註12の年表によると、中川八郎の不同舎の入学年は明治29年8月5日。
- 14 東京国立文化財研究所編『明治期美術展覧会出品目録』中央公論美術出版、1994年
- 15 森口多里『美術五十年史』鱒書房、1943年、p.p.163-167
- 16 明治31年5月8日発行の『最新東京案内・夏の巻』（東都沿革調査会編・教育社）に「此図は日本開闢以来、未曾有の大画にして、洋画家の泰斗小山萬溪先生の指揮設計により、洋画の名士石川寅治、満谷國四郎、佐久間時三郎、河合新造、吉澤儀造、桑原伊三郎の諸先生分担指揮せられ、尚ほ他に十余名の助手と、半年余りの日子とを費し、初めて大成せるものなり。」とある。また『小山正太郎先生』の石川寅治の記述のなかにも、旅順激戦図を描くのに、小山が戦後の旅順でスケッチするなどして構図を練り、石川と佐久間時三郎と満谷国四郎とで分担して、それぞれに助手を使い作業にあたったことが書かれている。
- 17 註15「日露戦争と畫壇」p.p.181-182に小杉放庵記文が掲載されている。小杉未醒の『戦時画報』の挿絵については他に、後藤康二「小杉未醒の日露戦争従軍画－『戦時画報』掲載の画を中心に－」『会津大学文化研究センター研究年報』第13号、会津大学、2006年詳しく、参照した。
- 18 山田直子「従軍した画家たち－『戦時画報』における不同舎門人の活動」『女子美術大学研究紀要』第33号、2003年、p.171
- 19 註18に同じ
- 20 田山花袋の従軍については、田山花袋『第二軍従征日記』博文社、1905年。また寺崎廣業の従軍については、小高根太郎「従軍畫家としての寺崎廣業」『美術研究』第75号、1938年3月、美術研究所が詳しく、参照した。
- 21 註18のp.170

- 22 註18のp.p.166-169の表（山田氏が各号の「画報」における「写真版版画」・「写真」、「読物」における「木版絵画」・「写真」の項目にわけて総数を数えて表にしたもの）のうち、「写真」を除き、画家ごとの数字を筆者が合計した数。
- 23 『小山正太郎先生』p.160
- 24 いずれも青木茂監修・東京文化財研究所編纂『近代日本アート・カタログ・コレクション 009 太平洋画会 第1巻』ゆまに書房、2001年。第3回の出品はp.172、第4回の出品はp.258に掲載。
- 25 註7に同じ。
- 26 『東京美術学校一覽』（東京藝術大学附属図書館蔵）の「従大正元年 至大正2年」巻以降「在米国」の表記が続くが「従大正十二年-十四年」巻以降は、大正11年に帰国したためか「在米国」の記載がなくなる。
- 27 太平洋画会の出品目録および住所を含む会員の記録は全て、青木茂監修・東京文化財研究所編纂『近代日本アート・カタログ・コレクション 太平洋画会』ゆまに書房の第1巻～第4巻、2001年を参照した。
- 28 註27の第3巻、p.593
- 29 日展史編纂委員会『日展史7 帝展編』社団法人日展、1982年
- 30 東京文化財研究所美術部編『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』東京文化財研究所、p.9とp.696、2006年
- 31 註30のp.692
- 32 三重県立美術館HP 掲載の東俊郎編・構成「藤島武二年譜」による。「1931年（昭和6）64歳 宮中花蔭亭パネルの制作依頼をうける。4～5月、長野県安茂里に旅行。5～6月、花蔭亭パネル制作のため、小林茂、蘆原曠とともに和歌山県潮岬に滞在、灯台の隣の神官宅にとまり早朝三時から描いた。」とある。
- 33 企画・編集：（株）資生堂企業文化部、柿崎孝夫、久保豊、監修：富山秀男『資生堂ギャラリー七十五年史1919-1994』求龍堂、1995年 p.84に「第一回昭和美術展覧会」の概要と写真が載る。蘆原曠の履歴についても簡単に触れており、「總覧」の内容と一致する。
- 34 東京文化財研究所のアーカイブデータベース「物故者記事 平井武雄」による。

蘆原緑子略年譜（年齢は満年齢）

年	年 齢	事 柄
明治8年(1875)		金沢に生まれる。
明治29年(1896)	21歳	浅草の日本パノラマ館で小山正太郎が二十余名の弟子と共に「平壤の戦い」を描いたパノラマ画を見る。 7月、不同舎に入学。
明治31年(1898)	23歳	3月25日～5月30日、上野公園旧博覧会跡第五号館で開催の明治美術会の「創立十年紀年展」に「肖像」墨畫、「肖像」墨畫の2点を出品。
明治32年(1899)	24歳	東京美術学校西洋画撰科入学。
明治33年(1900)	25歳	『小山正太郎先生』の「追分町時代の先生及塾生 明治三十三年頃」に本人と思われる写真が掲載。この時期はまだ不同舎にいたと思われる。
明治34年(1901)	26歳	9月28日発行の押川春浪『航海奇譚』（東京大学館）の口絵「海上の怪」を描く。
明治35年(1902)	27歳	5月、橋本忠夫(青雨)著『ほし草』（尚文館）刊行。挿絵を担当する。 8月、三浦白水訳『西詩余韻』（佐藤養治）刊行。挿絵を担当する。
明治36年(1903)	28歳	3月、『近事画報』発行(明治37年2月日露戦争勃発以降『戦時画報』と改題) 7月、東京美術学校西洋画撰科卒業。同校に自画像を残す。 卒業当時の西洋画科教授達 西洋画教授：黒田清輝 西洋考古学、美術解剖学：久米桂一郎 西洋画教授：岡田三郎助、和田英作 西洋画助教授：藤島武二、長原孝太郎 嘱託指南：小林萬吾、中村勝治郎 7月1日刊行の『新著文藝』第1巻第1号(弘文社)の表紙絵「美神」を描く。
明治37年(1904)	29歳	2月、日露戦争開戦。近事画報社に長崎佐世保に出張を命じられ、5月まで佐世保に滞在。 5月1日～6月6日、太平洋画会第3回展に「昨夜の夢」(油彩)「月」(水彩)を出品(上野公園5号館) 6月、佐渡丸砲弾の様子を同船の遭難者に取材し、13題の木版絵画を描く。広島県宇品に移り、戦況を取材。負傷した兵士の話から画報を描く。 10月下旬、満州に出帆。 11月、厳寒のなか沙河会戦の様子を取材。 同じ不同舎門の小杉未醒、横井俊造、木村想平らも従軍。小杉、横井と現地で会う。
明治38年(1905)	30歳	1月、旅順陥落 3月、奉天会戦を取材。寒さと疲労から体調を崩し4月に帰国。 4月1日～29日、太平洋画会第4回展に「戦地写生」を出品(上野公園3号館)*この時の出品目録に住所「本郷区駒込追分町97」が記載されている。 この年から滞米か。

年	年 齢	事 柄
		7月、『日露戦争写真画報』第28巻(博文館)の挿絵を担当する。 9月、日露講和条約(ポーツマス条約)締結。日露戦争終結。
明治40年(1907)	32歳	9月15日、森鷗外『うた日記』春陽堂より刊行。蘆原は挿絵を29図担当(ほかに久保田米斎6図、寺崎廣業1図)。
大正6年(1917)	42歳	この年、独立美術家協会開催の独立展覧会に出品(以後、継続出品か)。3月12日～24日、紐育日本美術協会主催第1回展(場所：The Yamanaka Galleries)に出品か。
大正7年(1918)	43歳	2月2日～10日、同第2回展(場所：Civic Club)に出品か。
大正11年(1922)	47歳	アメリカから帰国。
大正12年(1923)	48歳	3月3日～27日、太平洋画会第19回展(上野公園竹の台陳列館)に「紐育セントラルパーク」(油彩 第八室)を出品
大正13年(1924)	49歳	3月23日～4月8日、太平洋画会第20回展(上野公園竹の台陳列館)に「セントラルパーク」「夏の朝」「ニューヨーク郊外」「セントラルーパク(原文ママ)の雪」(油彩 小品室(A室))を出品。同展第七室にも「初夏の想」「一日の想」「三瓶山麓の雪」「自画像」「壁画草案」を出品。 5月、大連及び奉天で太平洋画会展覧会に「一日の想」「紐セントラルパーク」「五月」「三瓶山麓の雪」「雲」「ダッチ人形」を出品。 この時に太平洋画会会員となる。
大正14年(1925)	50歳	2月1日～27日、太平洋画会第21回展(上野公園竹の台陳列館)に「雪」「二軒茶屋」「運河」「御嶽みち」「セント、ジョンズ、カセドラル」(いずれも第六室 油彩)を出品。 10月16日～11月20日、第6回帝展の第二部絵画(西洋画)之部に「電車道」を出品。
昭和元年(1926)	51歳	1月23日～2月17日、太平洋画会第22回展(上野公園竹の台陳列館)に「ピーポー」「静物」「妙高山麓」「衣洗ふ人々」「菊花」「鹽原の秋」を出品(いずれも第五室 おそらく油彩) 同出品目録に会員の住所記載有り「芝區新堀町三一」。
昭和2年(1927)	52歳	2月12日～27日、太平洋画会第23回展(上野公園東京府美術館)に「雪」「河口」「雪(-)」(いずれも油彩)を出品。 同出品目録に会員の住所記載あり「芝區新堀町三一」。
昭和3年(1928)	53歳	2月22日～3月9日、太平洋画会第42回展に「ゴルフ」「スキー」(いずれも油彩)。同出品目録に会員名簿があり、会員の住所の記録が有る「芝區新堀町三一」。 この年、平井武雄、小林茂らと昭和美術会を創立。8月27日～29日、銀座の資生堂ギャラリーで第1回展を開催。《倉二つ》《妙義の朝》《多摩御陵附近》など油彩15点を展示。 この年、『ゴルフ漫画』(ゴルフドム刊行会)「アシハラヒロシ」の名前で刊行。

年	年 齢	事 柄
昭和4年(1929)	54歳	2月23日～3月9日、太平洋画会第25回展(上野公園東京府美術館)に「秋のある日」(おそらく油彩)を出品(第六室)。
昭和6年(1931)	56歳	藤島武二、宮中花蔭亭パネルの制作依頼を受ける。5月～6月、花蔭亭パネル制作のため小林茂、蘆原曠とともに和歌山県潮岬に滞在。
昭和7年(1932)	57歳	2月17日～28日、太平洋画会第28回展(上野公園東京府美術館)に「ダリヤと猫」「黒猫(一)」「黒猫(二)」第十室に出品。同目録に住所が記載されている「大阪市外箕面村桜ヶ丘」。
昭和8年(1933)	58歳	4月2日～14日太平洋画会第29回展(上野公園東京府美術館)に「夏日」出品。 4月21日～25日太平洋画会第29回展(岡山県商工奨励館)に「夏日」出品。
昭和9年(1934)	59歳	『小山正太郎先生』刊行(不同舎旧友会)。 2月、太平洋画会第30回展「眠」を出品。 5月1日～25日、「大札記念京都美術館美術展覧会」(京都)に「或る日の画室」出品。
昭和10年(1935)	60歳	太平洋画会第31回に出品記録なし。ただし同目録に会員名簿が掲載され昭和10年1月現在の住所が記録されている「大阪府豊能郡箕面村桜ヶ丘」。
昭和11年(1936)	61歳	太平洋画会第32回に出品記録なし。ただし同目録に会員名簿が掲載され、昭和11年2月現在の住所が記録されている「大阪府豊能郡箕面村桜ヶ丘」。
昭和12年(1937)	62歳	太平洋画会第32回に出品記録なし。同目録の会員名簿から名前、住所が削除されている。
昭和18年(1943)		没年不詳。ただし、平井武雄の物故記事に「故芦原曠」の表記あり。昭和12～18年の間に逝去したと思われる。